

CATV 戦場

の次なる

特集

地域バンド:TD-LTE

次なる選択は地域WiMAX⇒地域TD-LTE あるいは地域WiMAX+地域TD-LTEの道だ

CATV事業はトリプルプレイの実現でなんとか21世紀初頭のメディアシーンに残存できた。しかし、そのトリプルプレイも急激な“Everything On IP”と無線化への対応を余儀なくされている。まさに「近い将来、なんらかの無線事業に関与していないCATV事業者は市場から退場だ」という趨勢だ。CATV事業者はこの10年、地域WiMAXを手がかりに無線事業に首を突っ込んだ。正直にいうと事業は思うように進捗していない。それでも、ビジネス成功の萌芽は見えてきている。さて、それではCATV事業の次なる戦場といわれるBWAの本命(TD-LTE)を地域バンド事業者としてどう攻めていったらいいのか。J:COM+JCN経営統合で日本のCATV事業の約半分は巨大MSOによって支配された。独立系CATV事業者は次なる戦場でどのような選択をすればいいのか。地域無線事業に命をかけているフジクラの中村光則さんに、その処方箋を書いていただいた。(編集部)

中村光則 Nakamura Mitsunori
地域WiMAX推進協議会幹事
(株式会社フジクラ)

ソフトバンク(孫正義)の賭け

フィーチャーフォン、ガラパゴスケータイ(ガラケー)といった従来の携帯電話を過去のものにして一気に拡大を続けるスマートフォン(スマホ)やタブレット。その波に乗って、あるいは余波を受けて目まぐるしく動く“携帯電話キャリア”業界があり、その手のニュースが途絶えることはない。特に2012年10月に入ってイー・アクセスや米スプリント・ネクステルの買収発表で業界を沸かせたソフトバンクはその筆頭だ。

こうした動きは、端末のみならず無線インフラ方式の進化が影響を与えていることは明白であるが、同じような動きが

今後、日本の“地域アクセスバンド(地域バンド)”でも見られそうだ。地域バンドとは、2.5GHz帯BWA(Broadband Wireless Access)バンドに位置する、通称「地域WiMAX免許」バンドである。地域バンドは現在、モバイルWiMAX(IEEE802.16e)方式のみを扱うことが認められているが、今後、新たな方向へ舵を切っていくことになる。

LTE一色のライセンス・バンド

一般ユーザの利用を想定した無線通信としては、アン・ライセンス・バンド、つまりライセンス・フリーの無線LAN(Wi-Fi)と、ライセンス・バンドである携帯電話(スマホなど)やBWA等の2つに大別

される。

Wi-Fiは、昨今のスマホ普及とデータオフローディングの影響を受けて急拡大しており、国内で来春にも制度化の完了する5GHz帯の超高速Wi-Fi(IEEE802.11ac)による5GHz帯への移行開始など話題は満載だ。ただし、誰でも自由に使える「共用バンド」であるため、不安定なネットワークの性質上、単独の有料サービスに向かないバンドでもある(これについては別の機会で詳しく取り上げたい)。

一方で、信頼あるサービスを提供可能な「専用バンド(免許バンド)」である携帯/BWAバンドについては、世界がLTE方式で一色に染まる流れが着実に進みつつあり、既に状況はクリティカル・